

近年、「コモンズ」という言葉をよりどころに、実に様々な研究分野の人たちが集うようになりました。コモンズ(*commons*)とえば、近代以前のイギリスで牧草の管理を自治的に行ってきた制度として知られています。

イギリスのみならず世界各地で古くから行われており、たとえばわが国でも入会、共有という制度として機能してきました。日本の入会地では各種のタブーやアニミズム思想がコモンズの悲劇を防いだともいわれています。

コモンズ論的な資源管理は、生態学者 Garrett Hardin (アメリカ・1915-2003)が「コモンズの悲劇 *tragedy of the Commons*」として挙げたように、前近代的な資源の枯渇をまねきかねない制度として取り扱われてきました。しかし、コモンズ論的な考え方は、従来の公私二元論としてではない、「共」として、つまり地域住民レベルでの資源保全の有効な手法として、また地域共同体(コミュニティー)のあり方そのものとして、近年再び注目されつつあります。

地球温暖化やオゾン層の破壊など地球環境問題も地球というグローバル・コモンズにおける共有地の悲劇であるとみなせましょう。地球はみんなのものであるからこそ、みんなが好き勝手に行動すれば、結果環境を悪化させてしまいます。

里川は里山をもじった造語いや借用語でしょうか。故郷(ふるさと)の小川のイメージだけでなく、都会の川、街中の水路なども広く含んでいます。川を地域の財産、愛着ある場として共有しようとする立場にたっているようです。

国内を見渡しますと、福井市 は里川づくり推進事業を立ち上げ、「里地、里山、里川、里海」を地域の顔として里川にかぎらず平地、山、川、海を包み込んだ市民運動を展開しコミュニティー創りにむかっています。

県域の状況は神奈川県が湘南里川づくりとして湘南里川制度を創設しました。金目川水系流域の保全と活用を目指し湘南地域県政総合センターが平成一九年度から新たに県民との協働による湘南里川づくりに流域の人たちや平塚市、秦野市、伊勢原市と連携して取り組んでいます。

金目川水系の流域は里山や田園などの自然環境にも恵まれ、地域住民が主体となり協働して環境保全、地域づくり活動が活発になっています。湘南地域県政総合センターでは湘南地域のふるさとの川ともいえる金目川水系の魅力を県民に知ってもらうために湘南里川制度の構築を推進しています。

一級河川管理者の国土交通省では「里川とコモンズ」についてどのような展開をしているのでしょうか。荒川を例にとると荒川下流河川事務所に「新河岸川流域川づくり連絡会」があり、新河岸川流域新聞を継続発行しています。新河岸川流域では、総合治水対策や川づくり、水循環を一つの河川で考えるのではなく、支川やその流域の地域づくりも含んだ流域全体を考えようと取り組んでいます。

その一環として、各支川間での市民同士の情報交換や、市民と行政との情報交換のために、『新河岸川流域川づくり連絡会』を定期的に行っています。総合治水対策を含めた健全な水循環形成の意義・重要性等について、広く一般市民に理解を深めてもらうことを目的に、川づくり活動への参画や行政と市民、市民団体間のコミュニケーションの活性化と連携をふかめるため、流域フォーラムを毎年開催しています。川づくりにつながる発表会では、流域内の小学生から大学生までが川、水、環境について、日頃の活動成果を発表し、川についてさまざまな世代が交流する場としています。

流域新聞として下記のように新河岸川流域しんぶん「里川」を発行し、市民との



連携をより密接にたもっているのがうかがえます。

これまで述べてきたように水辺と人の新たな関係形成の「まくあけ」として里川とコモンズの相互関係が浮かんできました。川が存在が市民と切っても切れない貴重な存在だと認識した人びとは、お互い共有する資産あるいは財産として見直しました。川が廃棄の場とした風潮や、汚濁にまかせた世相などが、誰でも利用できることから無責任になりました。

将来の水資源を考えたとき、里川は里山がヒントを与えてくれたのは、里山が「使いながら守られた共有資源」であったこと、「守る仕組みを持っていたこと」。つまり

は、コモンズとして機能していたことにあります。この二点が、里川として水利用の管理に光を当ててくれるであろうことは、大いに推察できます。里山と違って「流域」の観点から都市部を流れる川も含めようというまなざしがあります。この視点にたって身近にある川を眺めることにしましょう。

浪速の川を考えると、淀川からわかれ生駒山地北部の水を集め、海に流れていた現在の「寝屋川」がうかびます。『日本書紀』仁徳天皇11年の「茨田(まんだ)の堤」築造記事が淀川本流から切り離す工事の困難さを今に伝えています。

日本書紀の記述は、

《仁徳天皇十一年(癸未三二三)四月甲午(十七)》十一年夏四月戊寅朔甲午。詔群臣曰。今朕視是国者。郊・沢曠遠。而田・圃少乏。且河水横逝、以流末不。聊逢霖雨。海潮逆上、而巷里乘船。道路亦泥。故群臣共視之。決横源而通海。塞逆流以全田宅。

《仁徳天皇十一年(癸未三二三)十月》冬十月。掘宮北之郊原。引南水以入西海。因以号其水曰堀江。又将防北河之。以築茨田堤。是時有兩处之築而乃壤之難塞。時天皇夢。有神、誨之曰。武蔵人強頸。河内人茨田連衫子。〈衫子。此云呂母能。〉二人以祭於河伯。必獲塞。則覓二人而得之。因以禱于河神。爰強頸泣悲之。没水而死。乃其堤成焉。唯衫子取全匏兩箇。臨于難塞水。乃取兩箇匏投於水中、請之曰。河神崇之。以吾為幣。是以令吾來也。必欲得我者。沈是匏而不令泛。則吾知真神。親入水中。若不得沈匏者。自知偽神。何徒亡吾身。於是飄風忽起。引匏没水。匏轉浪上而不沈。則瀚瀚汎以遠流。是以衫子雖不死。而其堤且成也。是因衫子之幹。其身非亡耳。故時人号其两处。曰強頸断間。衫子断間也。

《仁徳天皇十一年(癸未三二三)是歲》是歲。新羅人朝貢。則勞於是役。

と述べています。「天皇は、洪水や高潮を防ぐことを目的として、淀川に茨田堤を築いた。」という内容の記述であり、茨田堤の成立を物語るものといわれています。河内平野には、当時、草香江(または河内湖)と呼ばれる広大な湖・湿地帯が横たわっていました。北東からは淀川の分流が、南からは平野川(現代の大和川)が流入し、上町台地の北からは大きな砂州が伸びており、この砂州が草香江の排水を妨げていたため、淀川分流や平野川からの流入量が増えると、容易に洪水や高潮などの水害が発生していました。新たに造営された難波高津宮は、食糧や生産物

を供給する後背地を必要としていたので、ヤマト王権は、治水対策の目的も併せて、河内平野の開発を企てたようです。そこで、草香江に流入する淀川分流の流路安定を目的として、堤防を築造することとしました。堤防は、当時の淀川分流の流路に沿って 20 km 超にわたって築かれており、当時、この地方を「茨田」といったので、「茨田堤」と呼ばれるようになりました。茨田堤の痕跡は、河内平野北部を流れる古川沿いに現存しており、実際に築造されたことが判ります。

『日本書紀』には、「どうしても決壊してしまう場所が 2 か所あり、工事の成功を期して、それぞれの箇所には一人ずつ河伯(川の神)への人柱を立てられ、犠牲に選ばれたのは、武蔵の住人の強頸(こわくび)と河内の住人の茨田連衫子(まむたのみむらじのころものこ)で、強頸は泣きながら入水してゆき、衫子はひょうたんを使った頓知で死を免れたといえます。結果として、二か所とも工事は成功し、それぞれ強頸の断間(こわくびのたえま)・衫子の断間(ころものこのたえま)と呼ばれた。という記述があります。強頸の断間は現在の大阪市旭区千林、衫子の断間は寝屋川市大間に当たるそうです。

茨田堤を築造してほどなく、茨田屯倉(まむたのみやけ)が立てられたとあります。茨田堤によって水害が防がれたことにより、茨田地域が開発され、屯倉として設定されたのだと考えられます。また「天皇は、洪水や高潮を防ぐため、難波宮の北に水路を掘削させ、河内平野の水を難波の海へ排水できるようにし、堀江と名付けた。という内容の記述があり、堀江の成立を物語るものでしょう。

両者は、日本最初の大規模な土木事業だったとされています。寝屋川流域は低平地状をなし、淀川から切り離し工事が終わったのちも水面、湿地が多く広がっていました。ふりかえてみるとここは都市河川流域となり、身動きがとれないほどの社会資産と多くの水問題をかかえるようになってきました。[日本河川協会、河川文化：45号、参照]この流域は 1955 年代の高度経済成長期に地理的に大阪都心に近いことからベッドタウンとして発展、1970 年代には流域のほとんどが市街化して過密人口を抱える状態になりました。寝屋川は浪速の里川といえましょう。

寝屋川でみる治水対策には川と人との関わりが如実に示されています。1954年の一次計画は第二寝屋川、平野川分水路開削と河道改修。1976年の第二次計画は河道改修に加え遊水地、放水路による対応。1988年の第三次計画は第二次

計画に加え、地下河川、調節池、流域対応による対応になっています。1990年に「寝屋川流域整備計画」が策定され実施の運びになっています。

仁徳帝の代に茨田堤が築かれ、淀川からの水が寝屋川につながったときから時間の経過とともに今に至るまでその時代々々の都市化、市街化にともなった人と川との相克でもあったといえましょう。今それが貴重な共有財産・資源となっています。里川とコモンズを考えると、忘れられない浪速の川「寝屋川」です。

太間町 太間排水機場脇の幹線水路

[水路脇には桜が多く植えられ、大阪みどりの百選にも選ばれている]



[村岡；二〇〇九．三、私信より] 寝屋川地下河川の状況

